

## 幕末明治の写真師列伝 第四十三回 内田九一 その八

内田九一は、最初、大阪石町（大阪天満）で小曾根正雄の経営する写真館で写真技師として雇われ、撮影に従事していたようだ。おそらくそれは九一が開業独立するための資金の目安がまだなかったためなのだろう。また、「本邦寫眞家列傳（其十四）・故内田九一」（原田栗園『写真新報』第162号 明治45年3月）では、「氏既に業を卒ゆ、即ち師を辞して郷開を出で、遠く京阪の間に遊ぶ、時に慶応元年なり、居を大阪船場に構へ、時に出で、名勝風景を撮影し、其技量漸く世に現わる、人の勤むるに任せて順慶町に寫眞業を開く。」とあることから、この頃の九一は開業する目当てがつかず、近畿地方の京、大阪、奈良近郊の名所旧跡などの写真を撮影していたのであろう。

そして、最初、九一が住んでいた大阪の船場順慶町から、小曾根正雄の経営する写真館があった大阪石町（大阪天満）に通い、小曾根を手伝って写真撮影を行い、後に同じ場所で仮写場を設けて営業写真業を始めたようである。『アサヒカメラ』（昭和12年2月号）の松尾轟明「日本写真大年表 黎明編（続）」における西紀1865年、慶応元年乙丑の項では、「内田九一、大阪に足を留め天満天神東側に寫眞業を営む。歌妓うたを娶り後大阪鎗屋町に移る。」とあることから、内田九一は結婚後に今度は大阪鎗屋町（上町鎗屋町）へ移転して写真館を営業していたのであろう。

この慶応元年（1865）に硝子商を営み、二枚折の懐中硝子鏡を考案して、美人や俳優の写真をこの中に挿入して販売していた田村景美は、大阪時代の内田九一から写真術を学んでいる。このことは、『アサヒカメラ』（昭和12年2月号）の松尾轟明「日本写真大年表 黎明編（続）」における西紀1865年、慶応元年乙丑の項に「田村景美、硝子器洋燈商を創め二枚折懐中鏡を考案製す。その鏡面に美人俳優の寫眞を挿入、市に鬻出す。需要多し。為に自ら撮影せんと欲し上町鎗屋町内田九一につき蘊奥を究む。」と記述されているが、これは『月乃鏡』の「桑田寫眞館」の項に同様のことが書かれている。

小曾根正雄がどういう人物だったのかといえ、この人は長崎の貿易商に小曾根家があり、その当主・小曾根乾堂の弟である。また、長崎時代の松本良順が長崎の貿易商、小曾根乾堂と親しくしていたことが、「松本順自伝（蘭時自伝）」にも書かれている。その後の小曾根正雄については、『幕末維新・京都史跡事典』の「戊辰之役東軍伏見鳥羽淀八幡ニ於テ戦死及殉難者人名簿」に慶応4年（1868）正月3日、下鳥羽に於いて戦死した「陸軍奉行大久保主膳正家臣」としてその名がある。小曾根正雄は大久保主膳正の家臣として幕臣の端として連なったものの鳥羽伏見の戦いに於いて戦死したのである。ここでいう大久保主膳正というのは、幕末の京都東町奉行・大久保主膳正忠恕のことで、この人は文久3年当時、長崎奉行であった。

話が少し横にずれたが、内田九一は慶応元年（1865）に、最初は大阪石町（大阪天満）にて写場を設け、写真師として活動していたことが以上のことから伺われる。もしかしたら幕臣となった小曾根正雄の廃業の後を受けて大阪石町でそのま

ま開業したのではないだろうか。「本邦寫眞家列傳（其十四）・故内田九一」では、「人の勤むるに任せて順慶町に寫眞業を開く」とあるが、これは、『長崎南蛮余情 永見徳太郎の生涯』にある「内田九一覚えかき」によると、内田九一は慶応元年に写真業を始めるにあたって、「永見伝三郎の尽力、保護を得た」と記述されている事から、ここでいう「人の勤むるに任せて」の人とはこの永見伝三郎（注1）をさすものとも思える。

この永見伝三郎の永見家は、代々長崎会所の御用商人として産をなした資産家で、永見徳太郎は、自著編纂の『珍しい寫眞』という写真集の序で、「其内田九一先生が私の遠縁にあたり、又上野先生には、幼年の頃撮影して戴いた思ひ出もある」と述べている。これは、内田九一の二人の妹のうち、エイが、永見家の分家である永見栄次に嫁いだことから、永見徳太郎の永見家と内田九一とは、遠縁の関係となったのである。さらにこの薩摩藩御用商人・永見伝三郎の弟・米吉郎は慶応2年に五代友厚の世話で薩摩藩船海運丸に乗り、大阪（大阪大川町の御霊筋西北角）で、「永見商店」開業（大阪永見家祖）していることから、この永見米吉郎も内田九一の支援に関係があるのかもしれない。

長崎県立博物館には、後に内田九一が撮影した大版の長崎、京阪神戸の風景写真が十数枚収蔵されているが、その多くは後年、内田九一がこの永見伝三郎に贈ったものといわれている。

鈴木要吾『蘭学全盛時代と蘭時生涯』の「十八 寫眞術開祖」の項によると、「間もなく良順が長崎を引き上げるに就いては、九一も長崎より江戸へ出て開業したなら儲かるであろうと決心して良順の後を追ふて江戸へ出た。江戸へ出て良順の助力によって大阪の藝者おうたといふのを妻として浅草代地及横濱へ「うつし絵」の開業を始めた處が非常な繁昌を極めたものであった。「内田九一、商家の子なり十一歳父母を失ふ、幾予に依て生長寫眞術を好み頗る此道の恩人也寫眞術の開祖と云ふべし大量にして商事に巧なり早く死するも既に五六萬金を有す」（松本良順隨感）」とあり、内田九一がこの大阪時代に元芸子であった「おうた」という女性を妻として娶ったことがわかる。この「おうた」については小沢健志氏所蔵「内田九一夫人」（『日本の写真家1 上野彦馬と幕末の写真家たち』（岩波書店、1997年）図版21参照）といわれる写真があるが、これは間違っている。この女性は新橋の芸者の写真で内田九一夫人ではない。

注1：永見伝三郎

1831-1899 幕末明治時代の貿易商、銀行家。

天保2年生まれ。貿易、大名貸で産をなした永見屋に生まれる。明治5年松田源五郎と永見松田商社（のち立誠社）を設立。国立銀行条例の改正で明治10年第十八国立銀行にあらため、初代頭取となった。明治32年8月27日死去。69歳。肥前長崎出身。名は英昌。

（森重和雄）